

## 承空本『小野篁集』注釈の試み (2)

— 篁と異母妹の出会い (後半)・師走の月夜の場面 —

松 野 彩

【キーワード】 小野篁、小野篁集、篁物語、承空本

### 一、はじめに

『小野篁集』は『篁物語』とも呼ばれ、実在の人物・小野篁 (802～852年) を主人公とした物語である。作者は未詳、成立時期については諸説あるが、平安後期 (11世紀末)～平安末期 (12世紀末) と推定される<sup>1</sup>。

現存する最も古い写本として、鎌倉時代後期に書写された承空本<sup>2</sup>があるが、この写本を底本とした注釈書はこれまでに存在しないことから、筆者は「承空本『小野篁集』注釈の試み (1) 一篁と異母妹の出会い<sup>3</sup>」において、その冒頭部分の注釈・現代語訳を試みた。

本稿はそれに続く場面、[1] 篁と異母妹との出会いの場面の後半で、篁と異母妹が「吉野川」「妹背山」「淵瀬」などをキーワードとして和歌の贈答をする2つの場面、[2] 師走 (十二月) の月夜に篁と異母妹が親しく語り合っていると、異母妹の女房と思われる人が「師走の月を見るのは興ざめなものだ」と言うので、篁が和歌で反論し、それに対して女房が返歌するシーンである。

以下、本文、略記号一覧、注釈、現代語訳の順に提示する。

### 二、承空本・本文2

以下の承空本『小野篁集』の校訂本文は、中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」(『国士館人文学』第8号 [通巻50号]、2018年3月) による。

#### [1] 篁と異母妹の出会い (後半)

- 1       〔①篁〕中<sup>5</sup>に行く吉野の川はあせななん妹背<sup>な</sup>の山<sup>よしの、かは、</sup>を越えて見るべく
- 2       とありければ、「かかりける」と心遣<sup>つか</sup>ひしけれど、「情けなくやは」とて、
- 3       〔②女〕妹背山<sup>いもせ</sup>かげだに見えでやみぬべし吉野の川は濁れとぞ思ふ
- 4       また、男<sup>おとこ</sup>、

- 5 〔③篁〕濁る瀬はしばしばかりぞ水しあらば澄みなんとこそ頼みわたらめ  
 6 女、  
 7 〔④女〕淵瀬をばいかに知りてか渡らんと心を閔に人の言ふらむ  
 8 男、  
 9 〔⑤篁〕身のならん淵瀬も知らず妹背川おりたちぬべき心地のみして  
 10 かく言ふ程に、人憎からぬ世なれば、いとけふとくなかりけり。

## [2] 師走の月夜の場面

- 11 師走の十五日頃、月いと明きに、物語しけるを人見て、「誰ぞ。あな、すさまじ。  
 12 師走の月夜ともあるかなん」と言ひければ、  
 13 〔⑥篁〕春を待つ冬の限りと思ふにはかの月しもぞあはれなりける  
 14 返し、  
 15 〔⑦人〕年を経て思ひも飽かじこの月はみそかの人やあはれと思はむ  
 16 かく言ふ程に、夜更けにければ、「人うたて見むもの」とて、入りにけり。男は、  
 17 曹司にとみにも入らで、嘯きありきけり。

## 三、略記号一覧

注釈を施すにあたって、以下の注釈書を参照・比較した。なお、注釈書は、初版の時期が古いものから順に並べた。

### ・注釈書

- (校註) 宮田和一郎著『校註篁物語 校註海人刈藻ほか』(爾保布廻園、1936年)、以下の(和泉)に所収。
- (新校) …宮田和一郎著『新校篁物語』(爾保布廻園、1936年)、以下の(和泉)に所収。
- (新釈) …宮田和一郎著『新校篁物語』(健文社、1948年)、以下の(和泉)に所収。
- (河出) 西尾光雄・秋山虔・池田彌三郎・松尾聰『現代語譯 日本文學全集 更級日記・平中物語・篁物語・堤中納言物語』(河出書房、1954年)
- (朝日) 山岸徳平 校註『日本古典選 平中物語・和泉式部日記・篁物語』(朝日新聞社、1959年)
- (岩波) 遠藤嘉基・松尾聰校注『日本古典文学大系 篁物語 平中物語 濱松中納言物語』(岩波書店 1964年)
- (武蔵) 石原昭平・根本敬三・津本信博著『篁物語新講』(武蔵野書院、1977年)
- (全釈) 平野由紀子『私家集全釈叢書3 小野篁集全釈』(風間書房、1988年)
- (和泉) 平林文雄・水府明德会編著『増補改訂小野篁集・篁物語の研究 影印・

資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（和泉書院、2001年）

校異にあたって参照した写本は以下の通りである。【承】の影印は、『承空本私家集〈上〉』（冷泉家時雨亭叢書、2002年）を参照し、【書】【甲】【乙】については、前掲の（和泉）に所収の影印を参照した。

・写本

【承】承空本『小野篁集』

【書】宮内庁書陵部蔵『小野篁集』

【甲】水府明德会彰考館蔵『篁物語』（甲本）

【乙】水府明德会彰考館蔵『篁物語』（乙本）

#### 四、注釈

以下の○1、○2などの表記は、第二節の校訂本文の行数を示している。

##### ○1 なか ゆ よしの、かは、 中に行く吉野の川は

和歌①：篁が異母妹に対して詠んだ和歌の初句・第2句である。第2句の吉野川は、奈良県から和歌山県へと流れ紀伊水道に注ぐ一級水系「紀の川」上流についての奈良県内での呼び名である。奈良県吉野町で高見川と合流して極端な曲流をなすことで知られている。この川の両岸には二つの山があり、北岸のものを妹山、南岸のものを背山と呼ぶ。妹背とは男女の仲、夫婦の仲をさす言葉であり、その名を持つ背山と妹山を引き裂くように（男女の仲を引き裂くように）吉野川が流れていることになる。この地については『万葉集』をはじめとして和歌に詠まれてきた。語彙の上で多く一致するのが以下の『古今和歌集』の和歌で、（全釈）はこの歌を「ふまえている」とし、（武蔵）は「ふまえている」とは言わないが紹介している。

流れては妹背の山のなかに落つる吉野の河のよしや世の中

（古今和歌集・恋5・828・読人しらず<sup>7</sup>）

この和歌では、吉野川の急流が妹背山の間を隔てるものとされている。すなわち、2人の男女の仲を引き裂くものとしてとらえられており、『篁物語』の当該歌でも同様のことが言える。

##### ○1 あせなん あせなん

和歌①：篁が異母妹に対して詠んだ和歌の第3句で、「あせ」の終止形は「あす」である。『日本国語大辞典』<sup>8</sup>では、「あせる」で立項され、「海や川や湖など

の底が浅くなる。水が減って涸れる」の意味である。(全釈)は「竜田河秋は水なくあせなんあかぬ紅葉の流るれば惜し」(後撰和歌集・秋下・416・よみ人しらず)を例としてあげているが、『日本国語大辞典』によると、同様の意味での用例は『万葉集』から見られる。篁が水の浅くなることを希望しているのは、兩岸の妹背山に譬える自分たち2人が、2人の仲を引き裂く吉野川の水が浅くなることによって逢瀬を持てると考えるからである。

### ○1 妹背の山を越えて見るべく

和歌①：篁が異母妹に対して詠んだ和歌の第4・5句で、妹背の山は前述したように吉野川をはさんで立つ妹山、背山のことである。妹背は男女の仲、夫婦の仲について用いられることが多い言葉で、ここでは、「山を越えて見る」とあることから、障害になるものを越えて2人が結ばれることを篁が望んでいるということである。

### ○3 かげだに見えで

和歌②：異母妹から篁への返歌の第2句で、「かげ」は吉野川に映る妹背山の姿のことである。(全釈)が「「かげ」は、池や河面に映る物の影や、簾など物越しに映ってみえる形・姿のことだが、「かげだに見えで」とは、本人の姿を見せることはもちろん、その影すら見せないで、の意」としている通りで、篁の思いを受け入れない内容となっている。

### ○3 濁れとぞ思ふ

和歌②：異母妹から篁への返歌の第5句である。篁からの贈歌(和歌①)に「あせ」とあり、吉野川の水が浅くなることによって妹背の山の隔てがなくなる、つまり、異母妹と逢瀬を持つことを希求しているとあるのに対して、異母妹は(岩波)補注や(全釈)が指摘するように、川の水が濁るほどに水かさが増して、2人が会えないことを希望する内容になっており、篁からの和歌を切り返している。

### ○5 濁る瀬は

和歌③：篁から異母妹への和歌の初句で、「瀬」は浅瀬のことである。次の異母妹の返歌にある「淵」(川の深いところ)と対比して用いられている。

### ○5 水しあらば

和歌③：篁から異母妹への和歌の第3句である。(校註)(朝日)(岩波)補注は「水」の「み」に「見」を掛けるとする。これに従うと上の句の解釈は「濁る浅瀬はしばらくだけでも水がないならば(川が渡れ[逢瀬が持て])、つまり、逢

わないでいるならば」となり、掛詞としてうまく機能していない。ここは（全釈）の指摘に従い、「見」を掛けないで「濁る浅瀬はしばらくだけでも水がないならば（川が渡れ）、きっと澄むだろう（一緒に住むだろう）とあてにし続けるだろう」と解釈する。

#### ○5 澄みなんとこそ頼みわたらめ

和歌③：篁から異母妹への和歌の第4・5句で、「澄み」には「住み」が掛けられている。諸注は、（校註）（朝日）（岩波）補注（武蔵）（全釈）のように、掛詞であるとはっきり指摘するものと、訳出のさいに掛詞として解釈していることがわかるものがあるが、いずれにしても「澄み」「住み」の掛詞であることを認めている。ここには、一緒に住みたい（結婚したい）という篁の思いが表現されている。

#### ○7 淵瀬をば

和歌④：異母妹から篁への返歌の初句である。（岩波）以降の注釈書が指摘するように、「世の中はなにか常なるあすか河昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今和歌集・雑下・933・題しらず・読人しらず）」による表現で、「淵瀬」は変わりやすいものの譬えとして用いられている。

#### ○7 心を関に

和歌④：異母妹から篁への返歌の第4句である。【承】【書】の本文「せき」に従って解釈すると、「せき」は水を堰きとめる関のことで、そこから心の隔ての意味として用いられている。一首の解釈としては、「淵（深み）であるのか浅瀬であるのか（私の気持ちが深いのか浅いのか）をどうやって知って渡ろうと心を関所として（気持ちに隔てをおいて）あなたは言うのだろうか」の意味になる。「淵瀬」「関」は水に関係する言葉であるという点では妥当な表現だが、上の句と下の句の内容がうまくつながっていないことから、この本文に従うことは難しい。

一方、【甲】【乙】の本文「さき（先）」に従って解釈すると、「淵（深み）であるのか浅瀬であるのか（私の気持ちが深いのか浅いのか）をどうやって知って渡ろうと（自分の）気持ちを優先してあなたは言うのだろうか」の意味になり、意味が通じる。本稿は【承】を底本として最大限に解釈の可能性を探る試みであり、校訂本文では【承】の本文のままとしているが、ここは諸注に従い、【甲】【乙】の本文「さき（先）」によって解釈する。

#### ○9 身のならん淵瀬も知らず

和歌⑤：篁から異母妹への和歌の初句・第2句である。（岩波）の補注が「○

7 「淵瀬をば」の項目に掲載した『古今和歌集』933番歌をふまえているとしているのをはじめとして、(武蔵)が「おくれみて嘆かむよりは涙川われおり立たむまづながるべく」(『平中物語』・1「恋の禍」・455頁)、「淵は瀬になり変てふ飛鳥河渡見てこそ知るべかりけれ」(後撰和歌集・恋3・750・在原元方・女に、心ざしあるよしを言ひつかはしたりければ、世中の人の心さだめなければ頼みがたきよしを言ひて侍ければ)をふまえているとし、(全釈)は「ほかの瀬は深くなるらし明日香河昨日の淵ぞわが身なりける」(同・恋1・525・女の、人のもとにつかはしける)が参考になるとしているが、『平中物語』の場合には言葉の上での一致も少なく、(武蔵)(全釈)がそれぞれ指摘する『後撰和歌集』の2首も前掲の『古今和歌集』933番歌をふまえているものであり、これらは参考にとどめておくべきではないか。

この部分は、これまでの和歌での「淵」「瀬」の意味をふまえて、「我が身がどうなるのか深い淵になって2人が結ばれないのか、浅瀬になれば2人は結ばれるのかもわからず」の意味となる。

#### ○9 妹背川<sup>いもせ</sup>おりたちぬ<sup>こゝち</sup>べき心地のみして

和歌⑤: 篁から異母妹への和歌の第3～5句である。「妹背川」は、妹山と背山の間を流れる吉野川のことをさしており、○1「中に行く……」の項目で記したと同様に、「妹背」は夫婦関係を示す。「おりたち」については、(全釈)が恋の贈答歌では「河におりたつ」は「恋愛関係に入る」意をあらわすとしているのに従うと、この部分の解釈は、「(夫婦の名を持つ)妹背川に降り立つ、つまり、夫婦にきつとなるにちがいない(という)気持ちばかりがしている」の意味になる。

#### ○10 人憎<sup>にく</sup>からぬ<sup>よ</sup>世

「人憎し」は人を憎らしく思うという意味で、ここでは「人にくからぬ世」で「相手を憎く思わない(愛しく思われる)仲」の意味となる。諸注「こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば(古今和歌集・恋3・631・読人しらず)」による表現であると指摘している。

#### ○10 いとけふとく<sup>にく</sup>なかり<sup>よ</sup>けり

「けふとく」は形容詞「けふとし」の連用形である。『日本国語大辞典』では「けうとい」で立項され、「(1) 気にいらず、それから離れたい感じである。また、気持ちが離れてしまっている。いとわしい。うとうとしい」などの不快感を表す言葉で、諸注もこの部分について指摘するものは同様に不快感を表す解釈をしている。ここでは副詞の呼応「いと……なかり」の構文の中で用いられ、「全くうとうとしくはなかったのだった」と解釈することができる。

○12 師走<sup>ゝほす</sup>の月夜ともあるかなん<sup>い</sup>と言ひければ、

「月夜ともあるかなん」の部分について【承】【書】の本文は一致するが、【甲】【乙】は「月夜ともあるかな」となっている。【承】の本文をいかすならば、校訂本文の「」の位置を変えて、「……月夜ともあるか」なんと……」とすることができるのではないか。その場合の解釈は、「師走の月夜とも言うではないか」などと言ったので」となる。

なお、従来の「」の位置で「師走の月夜ともあるかなん」と……」とすると、そのままでは「ん」の解釈ができないので、(武蔵)をのぞく諸注が採用している【甲】【乙】「月夜ともあるかな」に従って解釈するのが妥当である。なお、(武蔵)は「月夜ともあるかなん」の本文を採用しているが、「おそらく、「ん」は衍<sup>10</sup>字であろう」としている。

なお、「師走の月夜」が平安時代に「すさまじきもの」と考えられていたことについては、複数の文学作品から確認でき、(全釈)にあげられた用例一覧が参考になる。

○13 春<sup>ま</sup>を待つ冬<sup>かぎ</sup>の限り<sup>おも</sup>と思ふには

和歌⑥: 篁から異母妹との語らいを見ていた人への贈歌の初句～第3句である。「春を待つ」については、(武蔵)が「女の心のとけるのを待つ意が含まれている」と指摘しているのに従って解釈すると、この部分は「(異母妹の心かとける)春を待つ冬の最後だと思う」との意味になる。

○13 かの月<sup>つき</sup>しもぞあはれなりける

和歌⑥: 篁から異母妹との語らいを見ていた人への贈歌の第4・5句である。「かの月」は「師走の月」のことで、この和歌の直前で、篁と異母妹が師走の月夜に仲良く語らっているところを見た人が「師走の月は興ざめだという」と言ったのに対して、「師走の月」こそが興味があるのだと言り返す内容となっている。

○15 年<sup>とし</sup>を経て<sup>へ</sup>思<sup>おも</sup>ひも飽<sup>あ</sup>かじ

和歌⑦: 異母妹との語らいを見ていた人から篁への返歌の初句・第2句である。第2句の「おもひ」の部分は、【承】【書】「おもひ」(名詞)で「年月が経って(異母妹)への思いは飽きることもあるまい」という意味であるのに対して、【甲】【乙】は「おもふ」(動詞)となり、「年月を経て(異母妹を)思っても飽きることはあるまい」の意味となり、大きな違いはない。ここでは、底本である【承】に従って解釈する。

この和歌について、(全釈)は異母妹自身の歌とするが、古典文学における女

性の返歌の典型、つまり、女性が男性の愛を拒絶する、疑う、いなすなどの形にはあてはまらず、篁の思いが永く続くことを願う内容となっており、(河出)が指摘するように、異母妹つきの女房が女主人への恋が永遠に続くことを願い返歌したものと解釈するほうがよいのではないか。

○15 みそかの人や

和歌⑦: 異母妹との語らいを見ていた人から篁への返歌の第4句である。「みそか」について、(朝日)(武蔵)は「密か」と「晦日(三十日)」が掛けられているとするが、「晦日(三十日)」で解釈すると一首の意味がとれない。ここでは、上の句との内容のつながりを考えて、「密か」の意味のみをとり、「秘密の恋をする人」と解釈しておく。

○17 曹司にとみにも入らで、

篁に与えられた部屋のことである。(全釈)は「曹司」は普通、宮中や貴族の邸内にある、女房や官人の宿所・部屋をさす」とするが、『うつほ物語』に「男君たちは、ある限り、廊を御曹司にしたまひて、板屋をさぶらひにしてなむありける」(うつほ物語・藤原の君・①135頁)とあり、源正頼の息子たちの部屋を「曹司」と言う例が多数見られることから、ここも同様の意味で、貴族の子息が邸内に与えられた部屋の意味として問題ないのではないか。「とみにも入らで」は、篁の異母妹と過ごした時間の余韻を楽しみたい気持ちを表している。

○17 うそぶく 嘯きありきけり。

「うそぶく」は、現代では『日本国語大辞典』「うそぶく」の項目の(5)の意味「てれかくしにそらとぼける。また、開き直ったり得意になったりして相手を無視するような態度をとる」などの意味で用いられるが、平安時代の物語では、漢詩や和歌を口ずさむことを言うことが多い。ここでも、篁は漢詩や和歌を口ずさんでいたということである。

## 五、現代語訳

第四節の注釈をふまえて、できるだけ承空本に忠実に訳したものが、以下の現代語訳である。番号は第二節に示した本文の行数を示している。

[1] 篁と異母妹の出会い(後半)

- 1 [①篁の歌](妹山と背山の間)間を流れて行く吉野の川は浅くなってほしい。  
妹山と背山を越えて逢うことができるように。



- 2 とあったので、(異母妹は)「こんな気持ち(自分に対する恋心)があったのだった」と警戒したけれど、「(学問の師に)つれない態度をとってよいだろうか(いやよくない)」とあって、
- 3 〔②異母妹の歌〕妹山と背山の影でさえも映らないで終わってしまうように、吉野の川は(水かさが増して)濁ってほしいと思う。
- 4 また、男(篁)(の詠んだ歌)、
- 5 〔③篁の歌〕濁る浅瀬はしばらくだけでも水がないならば(川が渡れ)、きっと澄むだろう(一緒に住むだろう)とあてにし続けるだろう。
- 6 女(異母妹)(の詠んだ歌)、
- 7 〔④異母妹の歌〕淵(深み)であるのか浅瀬であるのか(私の気持ちが深いのか浅いのか)をどうやって知って渡ろうと(自分の)気持ちを優先してあなたは言うのだろうか。
- 8 男(篁)、
- 9 〔⑤篁の歌〕我が身がどうなるのか深い淵になって2人が結ばれないのか、浅瀬になれば2人は結ばれるのかもわからず、(夫婦の名を持つ)妹背川に降り立つ、つまり、夫婦にきつとなるにちがいない(という)気持ちばかりがしている。
- 10 このように言ううちに、相手を憎く思わない(愛しく思われる)仲であるので、(2人の関係は)全くうとうとしくはなかったのだった。

## [2] 師走の月夜の場面

- 11 十二月の十五日頃、月がとても明るい時に、(篁と異母妹が)親しく語り合ったのをある人が見て、「(月を見ているのは)誰。ああ、興ざめな。
- 12 師走の月夜(は興ざめなものだ)とも言うではないか」などと言ったので、

- 13 〔⑥篁の歌〕(異母妹の心がとける)春を待つ冬の最後だと思いと、(興ざめであると言われる)あの師走の月こそがしみじみとした趣があるのであった。
- 14 (篁と異母妹の語らいを見ていた人の)返歌、
- 15 〔⑦篁と異母妹の語らいを見ていた人の歌〕年月が経って(異母妹への)思いは飽きることもあるまい。この月を秘密の恋をする人は感慨深く思わないのだろうか。いや、きっと感慨深く思うだろう。
- 16 こんなふうと言ううちに、夜が更けてしまったので、「(未婚の男女が語らっているのを)人が異様に見るだろうこと(だから)」と言って、(異母妹は部屋の奥に)入ってしまった。篁は、
- 17 自分の部屋にすぐにも入らないで、(和歌や漢詩などを)口ずさみながら歩いたのだった。

## 六、まとめ

本稿では、承空本『小野篁集』の冒頭に続く場面、[1] 篁と異母妹の出会い(後半)、[2] 師走の月夜の場面について、先行論をふまえて注釈をほどこし、現代語訳を行ってきた。

その作業の過程で、本稿で扱った範囲で見つかった、解釈に相違が出るような本文異同は以下の3例(下線部)で、これら3例は、すべて、【承】【書】の本文、【甲】【乙】の本文がそれぞれ一致していた。

○7 心を関に

○12 師走の月夜ともあるかなん」と言ひければ、

○15 年を経て思ひも飽かじ

これらのうち、○7については【承】の本文での解釈は難しいが、○12、○15はそのままで解釈が可能であり、本稿の範囲内では、【承】【書】のほうが【甲】【乙】よりもすぐれた本文を有しているということはなかった。

今後、承空本の位置づけを考える上では、より広範囲にわたって他の写本の本文との相違を分析するが必要であるので、残りの部分についても、順次、作業を進めていく予定である。

〈注〉

- 1 成立時期については諸説あるが、筆者は「角筆」「搔練」などの言葉を手がかりに、『篁物語』の成立時期を平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間ではないかと推定している。詳しくは、拙稿「『篁物語』成立年代再考 - 「角筆」を手がかりとして -」（『篁物語』の総合的研究（1））（『国士館人文学』第7号 [通巻49号]、2017年3月）、『篁物語』成立年代再考（2）「搔練」を手がかりとして（『篁物語』の総合的研究（2））」（同・第8号 [通巻50号]、2018年3月）を参照。
- 2 鎌倉時代後期の浄土宗西山派の僧侶、玄観房承空が筆写した写本のこと。承空は冷泉家とは遠縁にあたり、写本は現在、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫に保管されている。承空の詳しい来歴については仁藤智子「歌僧・承空の基礎的考察—『篁物語』書写の歴史的背景—」（『国士館人文学』第9号（通巻51号）、2019年3月）を参照。
- 3 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み（1）—篁と異母妹の出会い—」（『国士館人文学』第12号 [通巻54号]、2022年3月）。
- 4 異母妹の詠んだ和歌とする説もあるが、後述するような理由で、本稿では異母妹の女房による返歌と解釈した。
- 5 本稿で使用している中村による校訂本文には記載されていないが、和歌には（和泉）に従って通し番号を付した。なお、（和泉）では、登場人物ごとに数字の表記で区別しているが、本稿では便宜上、①②などの表記に統一した。
- 6 中村による校訂本文では「見えて」（清音）になっているが、ここは「見えて」では解釈できないので、中村の確認を得て「見えで」（濁音）に改めた。
- 7 本稿では、『小野篁集（篁物語）』『後撰和歌集』をのぞく古典文学作品の引用・検索はジャパンナレッジ所収の『新編日本古典文学全集』によった。
- 8 本稿では、『日本国語大辞典』（小学館）の引用はジャパンナレッジ所収の第二版によった。
- 9 以下、『後撰和歌集』の引用は片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（岩波書店、1990年）によった。
- 10 「衍字（えんじ）」は「誤って語句の中に入った不要な文字」（『日本国語大辞典』）の意味である。